方向

第九五号　一九八九年三月八日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

池の坊

原田　慶

一九八九年二月三日

「旧七夕会池坊全国華道展」という生け花の展覧会の招待券をもらって、昨年十一月十八日に友達をさそって出かけた。

烏丸通りから入るとそこは、十一階建てのビルをがっしりと支えるピロティーで、石畳の庭になっている。水の流れる音が響いて、四角く切られた池に、動くのが不思議なくらいの立派な錦鯉が群れていた。人が大勢いてざわざわと華やかなお祭り気分がただよっている。階段にそって壁にはめこまれた小さなタイルには、一枚ごとに県名と氏名が書かれていた。みんな師範の人だろうか、それぞれの人がたくさんのお弟子さんを持っておられるのだから、池の坊は大変な人数を抱えていることになる。

二階の会場へ入ると、大きい作品が並んでいて、造形美術の展覧会のようだった。金属、木板、ガラス、石、プラスチック、布、そして花や木の実、照明も工夫されていろいろに使われている。作品の題名も、音楽的なもの、物語的なもの、詩的なもの、宇宙から星のまたたきや、人工衛星の震動音などが聞こえてきそうな神秘的な雰囲気のものもある。この部屋のものは、ほとんど海外へ指導に行っておられる方の作品だった。それから八階まで各階ごとに特色のある生け花が展覧されていて、小さな作品もそれぞれに一つの世界を作っている。壷や水

盤も特別にあつらえたような、見なれないものが多く、白い砂や玉のような砂利、花を支える針金などがきれいに使われているものもあった。

なにより感嘆するのは、少しの花材、たとえば葉蘭一枚、白玉椿一枝、紅葉した樫の小さな枝一本、これだけできちんと自然の豊かさが、感じられるように生けられていることである。友達が「こういう材料なら、あんたとこの庭にいくらでもあるやんか」と言ったので、私も家に帰ってからさっそく、枯れすすきとすがれた小菊を使って生けてみたが、やはり間がぬけていた。勉強したこともないのに、基本からこつこつと研究を積み重ねてきた人の真似をしても、同じことができるはずがない、形だけのものではない事がよくわかった。

生け花を見ている時に、アナウンスがあって、「法要が始まりますので、関係の方は本堂へお集り下さい」と何度か言っていた。私は花を見ながら、何の法要だろう、生け花の展覧会に何故、法要を知らせるアナウンスがあるのだろうと考えていた。八階まで丹念に見て、少し休憩してから会場を出た。来た時と違った方向へ出て先程のアナウンスのわけがわかった。鯉のいる池を渡って出て来ると、そこは六角堂だったのである。六角さん、池の坊、専永さん、それぞれについての知識がばらばらだったのが、ここに来て初めて一つになったのだった。

紫雲山頂法寺というのが六角さんの寺号で、本尊の如意輪観音は像の丈一寸八分、聖徳太子の守り仏と伝えられる。聖徳太子が摂津の四天王寺を建立するために、用材を求めて山城の国の原野に入られたとき、清らかな泉があったので、守り仏を傍らの樹にかけて身を清められた。その夜、夢のお告げがあり、この地に、一本の杉の大樹で六角の御堂を造り、守り仏を安置するようにとの事だった。それで太子が建立されたのが、この六角堂で

ある。そして御供養の命を受けた小野妹子が入道して専務といい、太子が使われた池の傍らに坊を建てて住まったので、そこを池坊と呼んだということである。代々の住職は、朝夕に花を供えて仏前の供養をしたが、なかでも二十世の専慶は花を生けることに熱心で、形のよい枝や花をさがして、険しい山を歩きまわった。その心に感心された本尊の如意輪観音さんが、夢に立花の秘密を授けられたのだそうである。

専慶は室町時代の人で、その頃から毎年七月七日に七夕の星に手向けるために、門人が集まって花を生け、見物の人が群をなしたという。招待券に旧七夕会と記されていたのは、そのような歴史があったからなのだろう。私たちは六角さんを出て、もう一つの会場であるデパートに行った。池坊専永さんの作品はそちらにあって、大きな枯枝のかたまりに赤い実が飾ってあった。ずいぶんたくさんの生け花を見たが、約束どうりに生けてあるものから自由に生けたように見えるものへの変化が、私にはよくわからない。

年が新しくなってから、出掛けた帰りに六角さんへ行ってみると、六角堂は修理中で青いビニールに包まれてひっそりとしていた。中は暗くてローソクがあかあかとゆれ、吊り燈籠に鳩がとまっている。入り口の縁結びの柳は、地につくほど長く枝垂れて、先に結びつけられたおみくじが、風に揺れていた。嵯峨天皇が六角堂の観音さんに、美しい妃を得ることを祈願された時に、夢告があり、この柳の下にそのとおりの、うつくしい女の人が立っておられたといういわれで、縁結びの柳とされるらしい。お堂の中にはすっきりとした顔つきの、如意輪観音さんがおられるが、丈が一メートルくらいあるような気がする。前にある休憩所へ行ってみると、西国三十三ケ所の観音さんがずらりと並んでおられて、朱印帳の受付所もあった。六角さんは十八番札所である。休憩所の

女の人に「鳩がたくさんいますね」と言ったら、「ずっと昔からやそうです」と言われた。「ここの観音さんは一寸八分と書いてある本を見たのですけど、本当は一メートルほどあるのですね」とたずねると、「あれはお前立ちさんです、ご本尊は五センチ五ミリぐらいのちっちゃいお像で、箱に入れて箱に入れて、また箱に入れてしてあるのでめったに誰もおがむことはできしません」ということだった。

教えてもらって、観音さんのことが説明してある所へ行ってみると、「都名所図会」という本で私も読んだことが、板に美しい墨の文字で書かれていた。やはり観音像は丈が一寸八分だそうである。「縁結びの柳」と「へそ石」についての伝説を書いたものをもらったが、そのなかに、お堂の前にあるへそ石は、京都の中心に当たるもので垣武天皇の平安遷都の時、ここを基点に条坊が定められたという、いわくつきの石であることも書いてあった。休憩所ではへそ石餅というのを売っているらしいが、それは今日は休みだそうである。

お礼をいって休憩所を出ると、生け花展のあった会館の方へ行ってみた。聖徳太子の沐浴をしのぶ池庭として造られたという一階は、人の気配もなく、水の音も絶えて、寒い風が通り抜けていた。あの時の賑わいがうそのようにひっそりしているが、建物の中では、今日も師範の人が研修に努めておられるのだろう。休憩所の人が、「ここは、ふだんは生け花の先生達がおけいこに来はるのです。ふつうの人は入れません」と言っていた。

お師匠さんたちは毎日、教えたり研究したり、花から心が離れることはない。それこそ専慶師の願いが、大河のように、流れ続けているのだろうし、如意輪観音さんの、夢告の生きた証かもしれない。私はいつも、人間の熱意と勤勉さに出会って感嘆する。

ふとどこかで、ジージーというような機械音がするのに気がついた。見上げると、私の立っているすぐ上に、テレビカメラがにらんでいる、どきっとして下を見ると「関係者以外立入禁止」の立札もある。鯉にいたずらなどしなかったけれど、他に何かわるいことをしていないだろうかと考えながら急いで引き返した。門を出ると、暮れはじめた六角通りは人影も少なく、暖かい今年の冬に久し振りで京の底冷えを感じた。

如来出現の目的

—法華経巡礼27—　1989.2.23.　原田憲雄

2-7.　そこで世尊は、三たび長老シャーリプトラが願うのを知り、シャーリプトラにこういった——

いまあなたは、シャーリプトラよ、三度まで如来に願った。そのように願うあなたに、シャーリプトラよ、どうして説かないでいよう。シャーリプトラよ、よく聞き、しっかり心にきざみなさい。わたしはあなたに説きましょう。

世尊がこのことばを説くとすぐ、そのときその集会にいた思い上がったビク、ビク尼、男の信者、女の信者の五千人が立ち上がり、世尊の足を頂礼し、その集会から退出した。これは思いあがった不善根のため、得ていないものを得たと考え、覚っていないものを覚ったと考えていたので、おのれを傷つけられたと思い、集会から立ち去ったのである。世尊は沈黙して見過ごした。

atha khalu bhagavāṃs traitīyakam apy āyuṣmataḥ śāriputrasyādhyeṣanāṃ viditvāyuṣmantaṃ śāriput-

raṃ etad avocat / yad idānīṃ tvaṃ śāriputra yāvat traitīyakaṃ api tathāgataṃ adhyeṣase / evaṃ adhyeṣamāṇaṃ tvāṃ śāriputra kiṃ vakṣyāmi/tena hi śāriputra śṛnu sādhu ca suṣṭhu ca manasi kuru // bhāṣiṣye 'haṃ te// samanantara-bhāṣita ceyaṃ bhagavatā vāg atha khalu tataḥ parṣada ābhimānikānāṃ bhikṣūṇāṃ bhikṣuṇīnāṃ upāsakānāṃ upāsikānāṃ pañcamātrāṇi sahasrāṇy utthāyāsanebhyo bhagavataḥ pādau śirasābhivandityā tataḥ parṣado 'pakrāmanti sma / yathāpīdaṃ abhimānākuśalamūleprāpte prāpta-saṃjñino 'nadhigate 'dhigata-saṃjñinaḥ/ ta ātmānaṃ jñātva tataḥ parṣado'pakrāntāḥ / bhagavāṃś ca tūṣṇī bhāvenādhivāsayati sma //

シャーリプトラが説法を請い、それは無駄だと釈尊がとどめ、三たびシャーリプトラが請い、三たび釈尊がとどめる場面が前号の中心で、「三止三請」という題は、むかしからこの『法華経』の名所に名づけられたものであり、わたしの発明ではない。ところでこれに似たことが、釈尊の生涯の過ぎ去った日にも一度あった。それは釈尊がはじめて覚りをひらいたときのことで、『マハーヴァッガ』によれば次のようであった。

そのとき世尊は瞑想にふけっていたがこう思った「わたしの覚ったこの法は、深遠で、難解であり、智者だけが知りうるのだ。世間の衆生は執着を喜び、楽しみ、〈これによってあれがある〉という縁起の理法は見ることができず、執着を捨て、貪欲を離れ、ニルヴァーナの安らぎを楽しむこともむつかしい。わたしが法を説いても、ひとが理解しなければ、疲れるだけのことだ」と。そして次の偈がこころに浮かんだ。

苦労してわたしの覚りえたことを、

いままたどうして説くことができようか。
貪り、怒りにとりつかれた人々が、
この法をさとるのはやさしくない。
世間の流れに逆らって、微妙であり、
深遠で、分かりにくく、こまやかだから、
貪欲のくらやみに住む者には見がたいのだ。

そのとき世界の主である梵天は、世尊が法を説かれないならこの世は滅びると考え、世尊のまえに姿を現わし礼拝していった「世尊よ、法を説いてください。スガタよ、法を説いてください。この世には汚れの少ない人がいます。法を聞かなければ退歩しますが、聞けばそれを覚るでしょう」

世尊は「私の覚った法は深遠で分かりにくいから、説くのは無駄だ」と断わる。梵天はさらに請い、釈尊が断わり、梵天が三たび請うたので、衆生を憐れみ、仏眼で観察し、世間には様々の者がいるが、ある人々は来世と罪過への恐れを知っていることを見、梵天に偈を説いた。

甘露の門は開かれた。耳ある者は聞け、
おのれの信じることを捨てて。
梵天よ、人々を惑わすだろうと案じ、
微妙の法を、わたしは説こうとしなかったのだ。

梵天は、世尊が法を説くことを許されたのを知って、世尊に礼拝し姿を消した。

以上は「梵天の勧請」として有名である。真実というものが、いかに世間の常識とかけはなれるものであるか、真実を知った者がそれを語ることにいかにためらいを覚えるものであるか、という消息を示唆する物語である。そのためらいを乗り越えて法を語りはじめ、すでに四十年も語り続けた釈尊が、いままたこのようなためらいを見せているということは、釈尊がそれほどの大事を前にしているということであろう。シャーリプトラの三たびの請願によって、語ろうとした釈尊の決意も、なみなみならぬことなのであろう。その決意の表明と同時におこったのが、五千人の退席だった。「見過ごした」と訳した原語は「忍耐する」というほどの意である。きわめて劇的だが、教員ならだれもが体験することで、釈尊でもそうならと、むしろほっとすることかもしれぬ。話す者と聞く者とのこの意識の隔たりは、あるいは普遍的なものかもしれない。そうしてその普遍にふくまれる危機がここに摘出されているのであろう。

2.8. さて世尊は、長老シャーリプトラに話しかけた——

籾殻がなくなり、シャーリプトラよ、わたしの集会は、枝葉も落ち、信仰の核心ばかりとなった。いいことだ、シャーリプトラよ、思い上がった者たちがここから退席したのは。ではシャーリプトラよ、そのわけを話そう。

どうぞ、世尊よ。と長老シャーリプトラは、世尊にこたえた。

atha khalu bhagavān āyuṣmataṃ śāriputraṃ āmantrayate sma / niṣpalāvā me śāriputra parṣad apag-

ata-phalguḥ śraddhā-sāre pratiṣṭhitā / sādhu śāriputraiteṣām abhimānikānām ato 'pakramaṇam /

tena hi śāriputra bhāṣiṣya etam artham / sādhu bhagavann ity āyusmāñ śāriputro bhagavataḥ pratyaśrauṣīt //

五千人の退席を黙って見過ごしても、にがにがしい思いを避けることはできなかったのであろう。かれらが去ってのちシャーリプトラにむかっていうことばに出てきた「籾殻」に、その感情が端的に溢れている。「籾殻」は妙本にはなく、正本には「枝葉」もない。これはそれぞれの拠ったテキストに無かったのでは、おそらく、なく、この感情の表出が、翻訳にたずさわった当時の中国人には、はしたなく、あるいは大人げなくうけとめられたのではなかろうか。釈尊は慈悲のひとではあったが、偽善者ではない。そのことはパーリ語でつたえられた原始経典を読めばすなおに感受できよう。またインドのことばは中国の文語ほど体裁をつくろうことはせぬようである。しかし『論語』にも「郷原は徳の賊」といって偽善をきらい、イエス・キリストの『バイブル』にも、マホメットの『コーラン』にも、あらあらしいことばにことかかない。妙本も、この「籾殻」は、残しておくほうがよかったのではなかろうか。そうはいっても、ここでひっかかることも確かで、それが中国の仏教学界での論議の種となる。が、それは後日のこと、ここでは立ち入るまい。

2.9. 世尊は、こういった——

あるときいつか、シャーリプトラよ、如来はこのような法義を説く。それはたとえば、シャーリプトラよ、ウドンバラの花があるときいつか現れるように、そのように、シャーリプトラよ、如来はあるときいつか、

このような法義を説くのだ。わたしを信じなさい、シャーリプトラよ、わたしは真実を語る者、ありのまま語る者、そのとおりに語る者だ。如来の多義のことばは、シャーリプトラよ、さとりがたい。なぜなら、わたしはさまざまな解釈、説明、定義により、シャーリプトラよ、幾百千もの種々の巧みな方便により、法を明らかにしたからだ。思量分別を超え、如来によってのみ理解されるのが、シャーリプトラよ、妙法なのだ。それはどういうことかというと、ただ一つの目的、ただ一つの仕事のために、シャーリプトラよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った人が出現する、ということなのだ。シャーリプトラよ、如来のただ一つの目的、ただ一つの仕事、そのために如来、尊敬されるべき、正しく覚った人が世間に出現した大きな目的、大きな仕事とは、それは如来の知見を衆生に得させるために如来、尊敬されるべき、ただしく覚った人が世間に出現するのであり、如来の知見を衆生に示すために如来、尊敬されるべき、正しく覚ったひとが世間に出現するのであり、如来の知見に衆生を入れるために如来、尊敬されるべき、正しく覚ったひとが世間に出現するのであり、如来の知見を衆生に悟らせるために如来、尊敬されるべき、正しく覚った人が世間に出現するのであり、如来の知見への道に衆生を入らせるために如来、尊敬されるべき、正しく覚ったひとが世間に出現するのだ。これが、シャーリプトラよ、如来のただ一つの目的、ただ一つの仕事であり、世間に顕現する大きな目的、大きな仕事なのだ。このようにシャーリプトラよ、如来のただ一つの目的、ただ一つの仕事、大きな目的、大きな仕事というものを如来は実行するのだ。というのは、シャーリプトラよ、わたしこそ如来の知見を得させ、シャーリプトラよ、わたしこそ如来の知見を示し、シ

ャーリプトラよ、わたしこそ如来の知見に入らせ・シャーリプトラよ、わたしこそ如来の知見を悟らせ、シャーリプトラよ、わたしこそ如来の知見の道に入らせるのだからだ。ただ一つの乘りもの、一乘について、シャーリプトラよ、わたしは衆生にたいして法を説く。それは仏の乘りもの、佛乘なのであって、第二の、あるいは第三の乘りもの、二乘・三乘、というものを、シャーリプトラよ、わたしは認めない。十方世界のあらゆるところで、シャーリプトラよ、法はそのようであるのだ。なぜなら、シャーリプトラよ、過去の世でも、無量無数の十方世界に、如来、尊敬されるべき、正しく悟った人が、多くの人々の利益、多くの人々の幸福のために、世間をあわれみ、諸天や人間など大衆の利益、幸福のため出現し、種々にときほぐし、解説し、種々の原因、理由を開示し、援助し、解釈し、巧みな方便によって、衆生の種々の信解、種々の素質や意向のおもむくところをよく知り、法を説いたが、シャーリプトラよ、それらすべての仏も世尊も、ただ一乘についてのみ、衆生に法を説いたのだ。それは一切を知る究竟の仏乘なのだ。それはまた衆生に如来の知見を得させ、如来の知見を示し、如来の知見に入らせ、如来の知見を悟らせ、如来の知見の道に入らせる法を、衆生に説いたのであった。そしてシャーリプトラよ、それら過去の如来、尊敬されるべき、正しく覚った人からしたしく妙法を聞いた衆生はすべて、無上の正しい覚りの達成者となった。

bhagavān etad avocat/ kadācit karhicic chāriputra tathāgata evaṃrūpāṃ dharmadeśanāṃ kathayati/ tadyathāpi nāma śāriputrodumbarapuṣpaṃ kadācit karhicit saṃdṛśyate evaṃ eva śāriputra tathāga-

to 'pi kadācit karhicid evaṃrūpāṃ dharmadeśanāṃ kathayati / śraddadhata me śāriputra bhūtavādy aham asmi tathāvādy aham asmy ananyathāvādy aham asmi / durbhodyaṃ śāriputra tathāgatasya saṃdhābhāṣyam / tat kasya hetoḥ/ nānā-nirukti-nirdeśābhilāpa-nirdeśanair mayā śāriputra vividhair upāyakauśalya-śatasahasrair dharmaḥ saṃprakāśitaḥ/ atarko 'tarkāvacaras tathāgata-vijñeyaḥ śāriputra saddharmaḥ /tat kasya hetoḥ/ ekakṛtyena śāriputraikakaraṇīyena tathagato 'rhan samyaksaṃbuddho loka utpadyate mahākṛtyena mahākaraṇīyena / katamac ca śāriputra tathāgatasyaikakṛtyam ekakaraṇīyaṃ mahākṛtyaṃ mahākaraṇīyaṃ yena kṛtyena tathāgato'rhan samyaksaṃbuddho loka utpadyate / yad idaṃ tathāgata-jñānadarśana-samādāpana-hetu-nimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loka utpadyate / tathāgata-jñānadarśana-saṃdarśana-hetu-nimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loka utpadyate / tathāgata-jñānadarśanāvatāraṇa-hetu-nimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loka utpadyate / tathāgata-jñāna-pratibodhana-hetu-nimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loka utpadyate / tathāgata-jñānadarśana-mārgāvatāraṇa-hetu-nimittaṃ sattvānāṃ tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loka utpadyate / idaṃ tac chāriputra tathāgatasyaikakṛtyam ekakaraṇīyaṃ mahākṛtiyaṃ mahākaraṇīyam ekaprayojanaṃ loke prādurbhāvāya /iti hi śāriputra yat tathāgatasyaikakṛtyam ekakaraṇīyaṃ mahākṛtyaṃ mahākaraṇīyaṃ tat tathāgataḥ karoti / tat kasya hetoḥ / tathāgata-jñānadarśana-samādāpaka evāhaṃ śāriputra

tathāgata-jñānadarśana-saṃdarśaka evāhaṃ śāriputra tathāgata-jñāna-darśanāvatāraka evāhaṃ śāriputra tathāgata-jñānadarśana-pratibodhaka evāhaṃ śāriputra tathāgata-jñānadarśana-mārgāvatārāka evāhaṃ śāriputra / ekam evāhaṃ śāriputra yānam ārabhya sattvānāṃ dharmaṃ deśayāmi yad idaṃ buddhayānam / na kiṃcic chāriputra dvitīyaṃ vā tṛtīyaṃ vā yānaṃ saṃvidyate / sarvatraiṣā śāriputra dharmatā daśadigloke / tat kasya hetoḥ / ye 'pi te śāriputrātīte 'dhvany abhūvan daśasu dikṣv aprameyeṣu asaṃkhyeyeṣu lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhā bahujana-hitāya bahujana-sukhāya lokānukampāyai mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manuṣyānāṃ ca / ye nānābhinirhāra-nirdeśa-vividha-hetu-kāraṇa-nidarśanārambaṇa-nirukty-upāyakauśalyair nānādhimuktānāṃ sattvānāṃ nānā-dhātv-āśayānāṃ āśayaṃ viditvā dharmaṃ deśitavantaḥ/ te'pi sarve śāriputra buddhā bhagavanta ekaṃ eva yānaṃ ārabhya sattvānāṃ dharmaṃ deśitavanto yad idaṃ buddhayānaṃ sarvajñatā-paryavasānaṃ yad idaṃ tathāgata-jñānadarśana-samādāpanaṃ eva sattvānāṃ tathāgata-jñānadarśana-saṃdarśanaṃ eva tathāgata-jñānadarśanāvatāraṇaṃ eva tathāgata-jñānadarśana-pratibodhanaṃ eva tathāgata-jñānadarśana-mārgāvatāraṇaṃ eva saattvānāṃ dharmaṃ deśitavantaḥ / yair api śāriputra sattvais teṣāṃ atītānāṃ tathāgatānāṃ arhatāṃ samyaksaṃbuddhānāṃ antikāt saddharmaḥ śrutas te 'pi sarve 'nuttarāyāḥ samyaksaṃbodher lābhino 'bhūvan ||

「ウドンバラ」はクワ科のイチヂクの一種で、三千年に一度花が咲くといわれ、優曇鉢と音写され、その花は

優曇鉢華（うどんはつげ）とも優曇華（うどんげ）ともいい、仏典中にしばしば譬喩としてもちいられる。「如来の多義のことばはわかりにくい」とは、釈尊が『法華経』以前に説いてきた教えは、その時、その処、聞く相手に応じて、さまざまに説いたので、ある時にいったことと他の時にいったこととの間には矛盾することもあり、ビクの弟子に示したことと、在俗の信者に示したことに違いがあり、いずれが釈尊の真意か汲み取りにくく、全体として見通しにくい、というようなことであろう。妙本は「随宜説法」よろしきにしたがって法を説く、とたくみに要約している。「定義」を妙本は「譬喩」とし、これはテキストの文字の違いによるらしく、もしそうなら妙本の拠ったテキストのほうがよいだろう。「ただ一つの目的、ただ一つの仕事、大きな目的、大きな仕事」を妙本は「一大事因縁」とし、「得させる」「示す」「入れる」「悟らせる」「道に入らせる」の五つを妙本は「開」「示」「悟」「入」の四つにし、「シャーリプトラよ」と「如来、尊敬されるべき、正しく覚った人」の繰り返しをほとんど省いた。簡約する点では正本も同様で、そうしてサンスクリット本からの岩本、松濤両訳本もおなじである。南条、河口の両訳本が省かないのはテキストへの忠実さにおいて尊敬すべきだが、　おそらく専門の人以外はこれを読むことはしないだろう。わたし自身、このえんえんと続く繰り返しを、文字に書く文章として訳していて、いささかうんざりする。しかし、真言系の諸宗でとなえるお経は呉音ではなく、唐代の長安音に近いのだろうと聞いたこともあるが、セイセイセイセイセイ、セイセイセイセイセイ、といった音が、初めからしまいまでつづき、それが別にうるさくもなくて、かえって聞く耳に楽しく喜ばしく響き、気持がさえざえとしてくる。『法華経』のえんえんたる繰り返しも、インドでインド人の僧たちによって読誦されるのを聞けば、

歓喜がわきおこるかもしれぬ。

諸仏世尊。欲令衆生。開仏知見。使得清浄故。出現於世。欲示衆生。仏知見故。出現於世。欲令衆生。悟仏知見故。出現於世。欲令衆生。入仏知見道故。出現於世。舎利弗。是為諸仏。唯為一大事因縁故。出現於世。

これだけの文章を「欲令衆」（よくりょうしゅ）といってお経の習いはじめに暗記させられる。『法華経』の眼目はここにあるのだから、当然だが、なぜおぼえなければならないのかは、いま思い返してみても、教わった記憶はない。いや、これだけではなく、他のことについても、ことさらに教えられるということはなかったようだ。わたしの父は、その師父に中学にやってもらえず、寺を飛び出し、電気工夫などをし、十七、八になって身延にゆき、宿坊の小僧となり、泊まった信者からもらう心づけを貯めて、僧のための専門学校である檀林で学び、それでも卒業のとき優等賞をもらっているから、天台・日蓮の教学は一通りわきまえていたはずだが、お経の読みかた以外はあまり教えようとしなかった。読み方がわかれば、あとは自分で考えろ、ということだったのであろうか。

仏と同じ知見を、すべての衆生のものにしたいというのは、釈尊の願いであり、その願いを実現する方法・手段のすべてが方便なのだから、『法華経』以前に説いてきたことも、願いの表現のひとつではあったが、そのことがはっきり闡明されていたとはいえない。だから独覚はおのれのちいさな覚りに満足し、声聞は弟子たることに満足してみずから仏になろうとしない。『法華経』以前のさまざまの教えも、究極の目的は、衆生を仏にしよ

うとするところにあったので、それをいまここで明らかにするのだ、というのである。

老いておのれの限界のようなものが見えてくると、仏どころか、独覚も、声聞も、まともなひとりの人間としてさえ、おぼつかないのが実情で、『法華経』を読み、『法華経』を翻訳していても、鼻白むおもいがする。しかしそれは、謙遜にみえるかもしれぬが、実は思い上がっているのだ。というのが『法華経』の教えらしい。すべてのものは、世間でのさまざまの差別にかかわらず、仏となる素質をそなえている。目覚めて、ただしく努力しさえすれば、仏になりうる。そのことを説き続けるのが、釈尊であり、すべての仏なのだというのであろう。

?.10. またシャーリプトラよ、未来の世の十方の無量無数の世界に如来、尊敬されるべき、正しく覚った人が現れるだろう、多くの人々の利益、多くの人々の幸福のために、世間をあわれみ、諸天や人間など大衆の利益、幸福のために。かれらは種々にときほぐし、解説し、種々の原因、理由を開示し、援助し、解釈し、巧みな方便によって、衆生に種々の信解、種々の素質や意向のおもむくところをよく知り、法を説くだろう。シャーリプトラよ、かれらすべての仏も世尊も、ただ一乗についてのみ法を説くだろう。それは一切を知る究竟の仏乗なので、それはまた衆生に如来の知見を得させ、如来の知見を示し、如来の知見に入らせ、如来の知見を悟らせ、如来の知見の道に入らせる法を、衆生に説くだろう。そしてまたシャーリプトラよ、それら未来の如来、尊敬されるべき、正しく覚った人からしたしくその法を聞く衆生はすべて、無上の正しい覚りの達成者となるだろう。

ye 'pi te śāriputrānāgate'dhavani bhaviṣyanti daśasu dikṣv aprameyeṣv asaṃkhyeyeṣu lokadhātuṣu

tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhā bahujana-hitāya bahujana-sukhāya lokānukaṃpāyai mahato jan-akāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca / ye ca nānābhinirhāra-nirdeśa-vividha-hetu-kāraṇa-nidarśanārambhaṇa-nirukty-upāyakauśalyair nānādhimuktānāṃ sattvānāṃ nānādhatv-āśay-ānāṃ āśyaṃ viditvā dharmaṃ deśayiṣyanti / te'pi sarve śāriputra buddhā bhagavanta ekam eva yā-naṃ ārabhya sattvānāṃ dharmaṃ deśayiṣyanti yad idaṃ buddhayānaṃ sarvajñatā-paryavasānaṃ yad idaṃ tathāgata-jñānadarśana-samādāpanam eva sattvānāṃ tathāgata-jñānadarśana-saṃdarśanam eva tathāgata-jñānadarśanāvatāraṇam eva tathāgata-jñānadarśana-pratibodhanam eva tathāgata-jñānad-arśana-mārgāvatāraṇam eva sattvānāṃ dharmaṃ deśayiṣyanti / ye 'pi te śāriputra sattvās teṣāṃ anāgatānāṃ tathāgatānāṃ arhatāṃ samyaksaṃbuddhānāṃ antikāt taṃ dharmaṃ śroṣyanti te 'pi sarve 'nuttarāyāḥ samyaksaṃbodher lābhino bhaviṣyanti ||

仏の願いがそのようであるなら、仏と名のつくかぎり、未来の仏もその出現の目的は、仏知見をすべての衆生のものとするところにあるのだ。

2-11. またシャーリプトラよ、現在の世の十方の無量無数の世界に如来、尊敬されるべき、正しく覚った人がいて、とどまり、時をすごしていて、多くの人々の利益、多くの人々の幸福のために、法を説いている、世間をあわれみ、諸天や人間など大衆の利益、幸福のために。かれらは種々にときほぐし、解説し、種々の原因、理由を開示し、援助し、解釈し、巧みな方便によって、衆生に種々の信解、種々の素質や意向のお

もむくところをよく知り、法を説いている。シャーリプトラよ、かれらすべての仏も世尊も、ただ一乗についてのみ法を説く。それは一切を知る究竟の仏乗なので、それはまた衆生に如来の知見を得させ、如来の知見を示し、如来の知見に入らせ、如来の知見を悟らせ、如来の知見の道に入らせる法を、衆生に説いているのだ。そしてまたシャーリプトラよ、それらの現在の如来、尊敬されるべき、正しく覚った人からしたしくその法を聞く衆生はすべて、無上の正しい覚りの達成者となるだろう。

ye 'pi te śāriputraitarhi pratyutpanne'dhvani daśasu dikṣv aprameyeṣv asaṃkhyeyeṣu lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhās tiṣṭhanti dhriyante yāpayanti dharmaṃ ca deśayanti bahuja-na-hitāya bahujana-sukhāya lokānukampāyai mahato jana-kāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca mānuṣyāṇāṃ ca / ye nānābhinirhāra-nirdeśa-vividha-hetu-kāraṇa-nidarśanārambaṇa-nirukty-upāyak-auśalyair nānādhimuktānāṃ sattvānāṃ nānādhatv-āśayānāṃ āśayaṃ viditvā dharmaṃ deśayanti/ te'pi sarve śāriputra buddhā bhagavanta ekam eva yānam ārabhya sattvānāṃ dharmaṃ deśayanti yad idaṃ buddhayānaṃ sarvajñatā-paryavasānaṃ yad idaṃ tathāgata-jñānadarśana-samādāpanaṃ eva sattvānāṃ tathāgata-jñānadarśana-samdarśanaṃ eva tathāgata-jñānadarśanāvatāraṇaṃ eva tathāgata-jñānadar-śana-pratibodhanaṃ eva tathāgata-jñānadarśana-mārgāvatāraṇaṃ eva sattvānāṃ dharmaṃ deśayanti / ye'pi te śāriputra sattvās teṣāṃ pratyutpannānāṃ tathāgatānāṃ arhatāṃ samyaksambuddhānāṃ anti-kāt taṃ dharmaṃ śṛṇvanti te 'pi sarve 'nuttarāyāḥ samyaksambodher lābhino bhaviṣyanti //

そして、現在の、十方世界の仏たちも。この「十方世界」には、娑婆世界、あらっぽくいいかえればこの地球、は含まれていない。娑婆世界の仏は釈尊であり、その釈尊の目的・仕事が、あらためて次に説かれる。

2-12. わたしもまた、シャーリプトラよ、如来、尊敬されるべき、正しく覚った人として、多くの人々の利益、多くの人々の幸福のために、世間をあわれみ、諸天や人間など大衆の利益、幸福のために、種々にときほぐし、解説し、種々の原因、理由を開示し、援助し、解釈し、巧みな方便によって、衆生に種々の信解、種々の素質や意向のおもむくところをよく知り、法を説いている。わたしもまた、シャーリプトラよ、ただ一乗についてのみ、衆生に法を説く。それは一切を知る究竟の仏乗なので、それはまた衆生に如来の知見を得させ、如来の知見を示し、如来の知見に入らせ、如来の知見を悟らせ、如来の知見の道に入らせる法を、衆生に説くのだ。そしてまたシャーリプトラよ、いまわたしの法を聞いて、衆生はすべて、無上の正しい覚りの達成者となるだろう。それでまた、シャーリプトラよ、このことから知るべきである、十方世界のどこにも二乗は設けられない、まして三乗は、と。

aham api śāriputraitarhi tathāgato 'rhan samyaksambuddho bahujana-hitāya bahujana-sukhāya lok-ānukampāyai mahato jana-kāyasyārthāya hitāya sukhāya devānām ca manuṣyāṇām ca nānābhinirhāra-nirdeśa-vividha-hetu-kāraṇa-nidarśanārambaṇa-nirukty-upāyakauśalyair nānādhimuktānām sattvānām nānā-dhatv-āśayānām āśayam viditvā dharmam deśayami / aham api śāriputraikam eva yānam ārabhya sattvānām dharmam deśayami yad idam buddhayānam sarvajñatā-paryavasānam yad idam tathāgatajña-

nadarśana-samādāpanaṃ eva sattvānāṃ tathāgata-jñānadarśana-saṃdarśanaṃ eva tathāgata-jñānadarśanāvatāraṇaṃ eva tathāgata-jñānadarśana-pratibodhanaṃ eva tathāgata-jñānadarśana-mārgāvatāraṇaṃ eva sattvānāṃ dharmaṃ deśayami / ye'pi te śāriputra sattvā etarhi, mamemaṃ dharmaṃ śṛṇvanti te 'pi sarve 'nuttarāyāḥ samyaksambodher lābhino bhaviṣyanti / tad anenapi śāriputra prayāyeṇaivaṃ veditavyaṃ yathā nāsti dvitīyasya yānasya kvacid daśasu dikṣu loke prajñaptiḥ kutaḥ punas tṛtīyasya //

このような佛乘を説き聞かせる相手を、正本、妙本では、「ボサツ」だと指定する。現存梵本のいずれにも見えないようで、すっきりとわかりやすくはあるが、古いテキストには「ボサツ」とあったのであろう。

2-13. けれどもまた、シャーリプトラよ、世尊、尊敬されるべき、正しく覚った人は、時代が汚濁したときに出現する。あるいは衆生が汚濁し、煩悩が汚濁し、見解が汚濁し、寿命が汚濁したときに、出現する。そのような、シャーリプトラよ、混乱した時代に、貪欲で善根少ない多くの衆生に、シャーリプトラよ、世尊、尊敬されるべき、正しく覚った人が、巧みな方便で、あのただ一つの仏乘を、三つの乘に分けて解説するのだ。そのとき、シャーリプトラよ、声聞や、アラカンや、独覚で、仏乘を得させようとする如来のいとなみを、聞かず、知らず、覚らぬならば、かれらは、シャーリプトラよ、如来の声聞ではないと知るべきであり、アラカンでもなく、独覚でもないと、知るべきである。

api tu khalu punaḥ śāriputra yadā tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhaḥ kalpa-kaṣāye votpadyante

sattva-kaṣāye vā kleśa-kaṣāye vā dṛṣṭi-kaṣāye vāyuṣ-kaṣāue votpadyanye / evaṃ rūpeṣu śāriputra kalpa-saṃkṣobha-kaṣāyeṣu bahu-sattveṣu lubdheṣv alpa-kuśala-mūleṣu tadā śāriputra tathāgata arhantaḥ samyaksaṃbuddhā upāyakauśalyena tad evaikaṃ buddhayānaṃ triyāna-nirdeśana nīrdiśanti / tatra śāriputra ye śrāvakā arhantaḥ pratyehabuddhā veṃāṃ kryāṃ tathāgatasya buddhayāna-samādapanāṃ na śrṇvanti nāvataranti nāvabudhyanti na te śāriputra tathāgatasya śrāvakā veditavyā nāpy arhanto nāpy pratyekabuddhā veditavyāḥ //

如来の出現の目的と仕事がていねいにのべられたが、その如来が、どのような時代に出現するのかを説くのが、この一節である。

「時代の汚濁」以下の五つを五濁（ごじょく）といい、時代の環境社会の退廃が劫濁①、思想の悪化が見濁②、悪徳の噴出が煩悩濁③、人間の資質の低下が衆生濁④、衆生の生命維持の困難が命濁（みょうじょく）⑤である。命濁は、普通は寿命の短くなることをいうが、いまの日本でのように、心身ともに働かなくなりながら死ぬこともできない状況もまた、新しいタイプの命濁であろう。

このような汚濁の時代に出現するというのは、汚濁の浄化救済が、如来の大きな目的であり、仕事であるからであろう。衆生に仏乗を得させようとする如来のいとなみ、とはそのようなものに違いない。「仏乗を得させようとする如来のいとなみ」を、妙本は「諸仏如来がただボサツを教化する事」とする。正本もここには「ボサツ」の語はみえず、梵文の諸本も同様である。

如来がただボサツだけを教えるのだとすると、ここに出てくる声聞や、独覚や、ビク、ビク尼はどうなるのか、という疑問がわきあがる。そういうややこしさがない点で梵本のほうがすっきりしていて分かりいい。

しかし如来出現の目的が、世界の汚濁の浄化救済にあるとすれば、如来の手足となって浄化救済にこころざす人間、すなわちボサツ、をつくることもまた如来の仕事であろう。如来の弟子とは、ボサツをこそいうことになり、ボサツ以外に如来の弟子などはないことになる。声聞といい、独覚といい、ビクといい、ビク尼というのも、便宜的な名称の分類にすぎず、かれらが如来の弟子たるためにはボサツであるほかはなく、声聞も独覚もビクもビク尼もないのだから、如来が法を説くのは、ただボサツに対してのみということになる。汚濁の浄化救済が如来の目的・仕事であるなら、如来の目的・仕事の実現を目指すボサツの住所は、汚濁以外にはなく、五濁の娑婆世界はまさそれ、ということなのであろう。

2.14. しかしまた、シャーリブトラよ、たれかビクでも、ビク尼でも、アラカンになったといって、無上の正しい覚りへの誓願ももだず、わたしは佛乗から断ちきられているといい、これが涅槃へいたるわたしの生存の最後の身だというならば、かれを、シャーリブトラよ、思い上がった者と知るべきだ。なぜなら、シャーリブトラよ、煩悩の尽きたアラカンであるビクが、如来の面前で、この法を聞いて信じないことはありえず、その道理もない。ただ如来が涅槃した場合は除く。なぜなら、シャーリブトラよ、声聞たちは、如来の涅槃したときには、このような経典を保ったり、示したりしないからである。しかし、シャーリブトラよ、他の如来、尊敬されるべき、正しく覚った人のもとで、かれらは疑いのないものとなるだろう。こ

の諸仏の法において、シャーリプトラよ、わたしを信じ、任せ、従いなさい。じつに、シャーリプトラよ、如来たちのことばにいつわりはない。ただ一乗が、シャーリプトラよ、あるのみで、それは佛乗なのだ。

api tu khalu punaḥ śāriputra yaḥ kaścid bhikṣur vā bhikṣunī vārhattvaṃ pratijānīyād anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau praṇidhānaṃ aparigṛhyocchino'smi buddhayānād iti vaded etāvan me samucchrayasya paścimakaṃ parinirvāṇaṃ vaded ābhimānikaṃ taṃ śāriputra prajānīyāḥ / tat kasya hetoḥ / asthānam etac chāriputrānavakāśo yad bhikṣur arhan kṣīṇāsravaḥ saṃmukhībhūte tathāgata imaṃ dharmaṃ śrutvā na śraddadhyāt sthāpayitvā parinirvṛtasya tathāgatasya / tat kasya hetoḥ/ na hi te śāriputra śrāvakās tasmin kāle tasmin samaye parinirvṛte tathāgata eteṣāṃ evaṃrūpāṇāṃ sūtrāntānāṃ dhārakā vā deśakā vā bhaviṣyanti / anyeṣu punaḥ śāriputra tathāgateṣuv arhatsu samyaksaṃbuddheṣu nihsaṃśayā bhaviṣyanti/ imeṣu buddhadharmeṣu śraddadhādhvaṃ me śāriputra pattīyatāvakalpayata / na hi śāriputra tathāgatānāṃ mṛṣāvādaḥ saṃvidyate/ ekam evedaṃ śāriputra yānam yad idam buddhayānam ||

「生存の最後の身」とは、修行者が煩悩が尽きアラカンになると、今の生存を最後として生死の輪廻を繰り返さないようになることをいう。その状態に入ることを小乗仏教では最高の涅槃と考えた。「如来が涅槃した場合」というのは、法の体現者である如来も、歴史的人格であるためには肉身をもたねばならず、肉身は死なねばならず、如来の教えも忘れられるからである。真理も、あらわれとしては諸行のひとつであり、無常なのだ。

※「如来出現の目的」を書いていて、ふと父のことが飛び出したので考えてみると、その誕生日が近付いているのだった。それで　この号を父原田海温（本米院日暁上人）の生日に捧げることにする。

父は、一八八八年三月八日、神戸市で生れ、名は輝男。翌年生母笠原マサが死に、原田スギの子として届出、養育される。九五年、明石市本立寺に移り、九八年、十一歳で得度し、海温と改名。小学卒業後、寺を出て、さまざまな職業につく。養母を引き取り共に暮したかったらしい。哲学館の通信講座などを受けるが、世間で通る学歴としては小学校だけだから、以後ずいぶん口惜しい思いを重ねたらしい。一九〇四年、その母スギが五十九歳で死ぬ。一一年、身延の祖山大学院予科（さきにいう檀林）入学、翌年修了。一三年、二十六歳で大阪府乾性寺住職。一四年、朝鮮布教助手として黄海道延白郡延安布教所詰めを命ぜられ赴任。信者をつくりながら布教所を開設するのがその任務だった。川崎美津と結婚。一七年、布教所を新築するが、美津のマラリヤ悪化のため帰国。一八年、大阪府堺市櫛笥寺住職。浜辺の漁村に布教し、二一年、本堂・庫裏大改修。二三年、私立明浄高等女学校書記となる。二六年、明浄を辞任、京都市妙徳寺に転住。マキノキネマから四谷怪談のロケに使わせてくれと頼みにくる荒れ寺だった。二八年、本圀寺立明徳高等裁縫女学校書記。三〇年、同教諭兼任。三一年、本堂庫裏改築。三二年、日蓮上人六百五十遠忌法要修行。このころは経済不況のどん底で、改築の借金返済と、勤め先の経営責任を両肩に背負うこととなり、心身をすりへらす日々が四三年九月九日の死にいたるまで続く。このほか司法保護委員として受刑者の家族や、刑余者の職業斡旋にも走り回っていた。五十六年の一生は奮闘努力の連続だった。父と同年配の人は、おおむね同じ苦労をされたのだと思うけれども。（一九八九年三月六日、憲雄）